

大阪 ■ ■

No.34 2005.11.26.

大阪哲学学校運営委員会 Copyright©, 2005

哲学学校

【郵便振替】 01170-1-81313
【E-mail】 oisp@mac.com (臨時アドレス)
【Home Page】 <http://oisp.jp/>
【Net Forum】 ホームページに掲示板を開設
【代表者】 山本 晴義 (校長)
【発行者】 平等 文博 (運営委員長)
【編集者】 平等 文博
【連絡先】 080-3109-6291

■ ■ 通信

若者就業問題と社会問題の心理主義化

関口 敦男 (会員)

私は、茨城県の最北部、福島県との県境にある北茨城市で、自然薯栽培・山野草栽培を中心とした地域起し、都市・農村交流をミッションにしたNPOの事務局員をしています。

活動の中心は、これまで見過ごされてきた農村の自然、人、暮らしぶりといった「地域資源」を再発見して、農村の地域振興、また都市住民との交流、遊休農地の有効活用をしようというものです。

また、縁あって「社会的にひきごもり」がちな青年で外に出られるようになった方のたまり場づくり、就労準備を支援する「青年サポート事業」をする別のNPOや、「社会的ひきこもり」の青年を子供に持つ「親の会」にもボランティアで参加しています。

近年、失業問題もそれまでの中高年の失業から若年者の失業率の高さ、大学・高校生の就職難がクローズアップされています。しかしそれは「フリーター」、「ニート」として主として「定職に就かず、自由にあこがれる」、「学校へも行かず、就職活動も、職業訓練も受けようとしないう」で親にパラサイトして暮らす働く意欲のない自

堕落な若者の問題としてマスコミにとり上げられるものになっています。

例えば、今年10月22日にNHKで放映された『日本の、これから「若者たちよ・このままではニッポンがもたない』』では「▽フリーターやニートなど学び・働く意欲のない若者▽選挙離れや年金不払いなど社会への参画意欲のない若者▽社会常識のない若者」、「フリーターやニートに象徴される若者世代は「意欲がなく、モラルに欠け、社会への参画意欲もない」と批判されがち」という形のものでした。多くのマスコミも若年者の就労問題としてではなく、働かず税金や年金も取めないため、日本の財政破綻にもつながる問題として問題にされています。

またそのような若年者に対して一部政治家からは「自衛隊に入隊させろ」「イラクへ派遣せよ」という暴論まで出されています。

また内閣府・厚生労働省・経済産業省・文部科学省が作成した「若者自立・挑戦プラン」は具体的に現在の若年者の就労難＝雇用の減少、非正規雇用の増大の問題、また若年者の具体的な職業能力形成の問題にはほとんど触れず、キャ

リア意識の形成・キャリアコンサルティングの重視、果ては「若者の人間力を高める国民会議」を結成し（議長は奥田・日経連会長）、「若者の人間力を高める」国民運動なるものを展開しています。

これらの動きには小沢牧子さんが『心の専門家』はいらない』『心を商品化する社会』（洋泉社新書）で指摘しているように若年者の就労問題という社会構造問題を若年者の意欲の問題にすりかえる「社会問題の心理主義化・心理主義的解決」が大きな問題としてあるように思います。

また日経新聞に載った次のような批判もあります。

『危ういニート観 若者より社会構造に問題（お茶の水女子大学教授 耳塚寛明）

ニート（NEET）。職を持たず、学校にも職業訓練機関にも在籍していない若者を指すこの言葉は、昨年またたく間に流行した。ニートは現代青年の欠陥を告発する言葉になった。若年雇用・教育政策にとっても最大のターゲットといってよい。

だが"ニート"は危険な^{まなざ}眼差しだ。ニートには、働く意欲を欠いたひきこもり型イメージが付与されてしまった。政府の「若者の自立・挑戦のためのアクション・プラン」には、意欲と自信を欠いて引きこもるニート像が濃厚に漂う。

ニート研究の第一人者小杉礼子さんは、ニートをヤンキー型（享乐的）ひきこもり型 立ちすくみ型 つまずき型（自信を喪失）に分類する。

一見、先のニート像を実証しているようだが、根本的に違う。若者がなぜそのような状況に陥ってしまうのか、その分析が必要だと訴えているからである。困難に直面したとき、享楽に走り、自信を失い、立ちすくむのは若者だけではない。

ニートという概念を通して見なければならぬのは、今の若者の「こころ」の欠陥ではない。数十万にもおよぶ若者をニートへの道へと向かわせ、脱出を困難にさせている社会構造にほか大阪哲学学校通信 No.34

ならない。労働市場と教育訓練機関、さらには家族のあり方に踏み込んで、ニートを生む背景を見る必要がある。

『流行概念は人々の目をひらかせるが、時に見えなくもする。』

また「若者と仕事」（東京大学出版会 2005年3月）を執筆し、このような「ニート論」に反対している本田由紀さん（東京大学教授）のブログ「もじれの日々」<http://d.hatena.ne.jp/yukihonda/200510>には次のような若者の声が寄せられています。

『はじめまして。雇用問題に直面している20代です。

日記の内容と直接は関係のない投稿ですが、『若者と仕事』を拝読しました。

読み終えて、理解してくれている方もいるのだ、という印象です。

確かに、私自身、仕事というものに対する認識が甘かったと反省する部分もあります。

しかし、現在の若者の就職をめぐる状況の原因のすべてを、若者の甘えに帰してしまう論を見聞きすると、精神的リンチを受けているようです。

「学校経由型就職」によってうまく就職できて、役所、会社等に逃げ込んだ世代の人たちに、安全地帯から石を投げられている感を持ちます。安定した身分、収入がないことの不安さは、我が身を振り返ればわかるはずなのに。

また、内藤朝雄先生が、「おまえもニートだ」のなかで、現在の若者をめぐる状況を、ナチス時代の状況と比較して論じてらっしゃいましたが、実際、「ナチス時代のユダヤ人は自分の状況のようだったのかな」と感じることもあります。…』

このように、若年者の就労問題という社会構造問題を若年者の心理问题とし、パッシングする動きに対しては批判されなければなりません。

本田由紀さんのブログでの合言葉は、『説教するなら、職をくれ!』です。至極名言だと思います。

9・11後のハリウッド映画「再見」

はぎま くろう
間 九朗 (会員)

近年のアメリカ映画は戦争、そして宇宙からきた生命体の地球侵略などの主題をもつものが多くなってきたと思う。私が2002年にレポートした「ブラックホーク・ダウン」(リドリー・スコット監督)、「ワンス・アンド・フォーエヴァー」(ランダム・ウォレス監督)、「マジスティック」(フランク・ダラボン監督)などの過去のアメリカの対外戦争を直接・間接に描いたもの、そして今年公開された「スター・ウォーズ エピソード3」をはじめとする、「サイン」(M・ナイト・シャマラン監督)、「エイリアンVSプレデター」(ポール・アンダーソン監督)、そしてこの連休中に観たスピルバーグ監督の「宇宙戦争」(H.G. ウェルズのSF小説が原作)などである。これらの戦争映画を観て、私はまた様々なことを考えた。それらを今回書いてみようと思う。

文化的な表現は、その国の政治・社会(戦争があればなおさらだ)を映すという。ベトナム戦争の時も、アメリカでは様々なカウンター・カルチャーの華が咲き、多くの優れた政治的メッセージを含んだ表現が生まれた。特に音楽・映画などのサブカルチャーにそれは著しい。私は何もこれらの戦争映画が、アメリカが今行っているアフガニスタン・イラク戦争を賛美しているものとは言わない。それらはアメリカ国民が抱いている戦争への恐れ、不安を映し出しているのだ。

しかし、ここへきて、こうも宇宙人の侵略の映画が多いのはなぜだろうか。私は精神分析的に言って、ここにはアメリカ人の無意識の戦争への肯定が現われていると思う。そして、ここにはとんでもない重要なパラドックスが含まれ

ていると思う。すなわち、戦争はなくなる。というよりなくなっただけとはいけない。それは地球人類がいずれ訪れるかもしれない異星人からの侵略にそなえ(「アルマゲドン」のような隕石の衝突などの場合もあり得る)、戦闘武器を進化させ、戦闘意欲を維持し、優生の遺伝子を残すための淘汰なのだ、というような考えが奥底に潜んでいないだろうか。私は戦争が「悪」だという考えを棄てていないが、残念ながらアメリカの参戦があったから現在の自由主義世界が存続しているという歴史的事実がある。日本が現在まで戦争も無く経済発展を遂げてこられたのもアメリカの核の傘に守られていたからだ。

しかし、日本の平和憲法はこれからの世界には重要である。世界はアメリカ一極化に進行しているが、世界人類の共存のため戦争をなくし、武器を放棄していくという考えには素晴らしい可能性がある。しかし、それが人類の戦闘的意欲を殺ぐものであるとしたら。アメリカやロシアは宇宙開発を進め、冒険心を維持しているが、それだけで大丈夫だろうか。戦闘意欲の維持と人類の平和的共存。これらは両立しうるのか。武器をなくしてそれで平和が維持できるのだろうか。これらはとんでもないパラドックスである。「宇宙戦争」でトム・クルーズ演じる主人公は勇敢にエイリアンと戦うが、未来の人間たちにそれらの行為は可能だろうか。

少し空想的にすぎた話かもしれない。しかし、文化表現に時代の表象・徴候をみる私にとってこれらは考えておかねばならない課題だと思う。最後になるが、マイケル・ムーア監督の「華氏911」はすぐれたドキュメンタリー映画である。これが近年私が最もお勧めする戦争に関する

る映画作品である。時代がどんな状況に変化し けはあってはならないと私は考える。(了)
 ようとも、戦争への問題意識、それを失う事だ

大阪哲学学校活動日誌 (「通信」33号発行以降)

- 2005 8.27.「大阪哲学学校通信」第33号発行
 8.27. 2005年夏期合宿 ※大阪唯研哲学部会・季報唯研刊行会と共催
 ～ 28. 報告1・木村倫幸、室伏志畔「鶴見俊輔論をめぐって」
 交流会、ヨーガ(伊元勇)
 報告2・山本晴義「戦後大阪における哲学の潮流—藤本進治論」
 報告3・恒木健太郎「ウェーバーとゾンバルトの『証券取引所論』について」
 9.10. シンポジウム「やすいゆたか『評伝・梅原猛』をめぐって」
 批評・藤田友治(代読)、梅川邦夫、日下部吉信、蘆田東一、西川富雄
 リプライ・やすいゆたか 司会・田辺 聡
 9.24. 大阪の歴史と文化(1)
 「倉橋仙太郎と堺の新文化村」……………講師・北崎豊二
 10. 8. <知の歴史> 入門講座・第3シリーズ
 「ヘーゲルの『精神現象学』を読む」(1)……………講師・田畑 稔
 10.22. <知の歴史> 入門講座・第3シリーズ
 「ヘーゲルの『精神現象学』を読む」(2)……………講師・田畑 稔
 11. 3. 大阪哲学学校第11回(2005年)総会
 11.12. <知の歴史> 入門講座・第3シリーズ
 「ヘーゲルの『精神現象学』を読む」(3)……………講師・田畑 稔

運動誌・研究誌

◆哲学学校の会員や参加者の中には、それぞれの関心からさまざまな市民運動や研究会に参加・運営をしておられる方がいます。そうした方々が、お書きになった文章や活動紹介を兼ねて出版物などを送ってくださいます。最近はそのようなものをいただきました。会員交流の一助としてご紹介いたします。(※各連絡先を知りたい方は哲学学校事務局までお問い合わせ下さい)

●『季報・唯物論研究』第93号(2005/08/31)、『季報唯研』刊行会発行

特集「性に向かい合う哲学」

平等文博、柴崎律、細谷実、高根英博、川上睦子、伊田広行、室伏志畔、藤田友治、
 児玉ひかる、ほか執筆

●「青潮会通信」第1号(2005/06/17)、第2号(2005/09/08) 編集・松尾猛省

会員の松尾猛省さんらが中心になって青潮会という尼崎市民の集まりがつくられ、通信の発行や講演会の開催などの活動を始められました。第1号に掲載された「青潮会とは」によれば、会の趣旨は次のようなものです。

「青潮会は小田公民館、市民大学の有志の集まりのもとに出来た会です。その趣旨は高齢化社会の生きがい、お互いの意見交換、地域社会のコミュニティをひろめ、ひいては街の活性化に寄与できればとの思いで結成されたものです」

11月30日午後2時から、西川富雄さんの講演「21世紀の日本のゆくえ」を潮江コミュニティ集会所(JR尼崎から徒歩)で開催するとのこと。ご関心のある方は、松尾さんご本人か、尼崎市潮江2-2-7「青潮会」までお問い合わせください。

ギルガメシュの人間論

やすい ゆたか（会員、講師）

陽一は砂漠で目覚め彷徨り

キャラバン隊長ギルガメシュと呼ぶ

上村 陽一は自分のはらわたからの激しい衝撃で、粉々にはじけとび真っ白になるのを覚えた。自分は消滅したのだ。しかし消滅したという意識は矛盾している。消滅したのなら消滅したことを意識できない筈だから。これは消滅の疑似体験にすぎないのだ。消滅のショックで上村 陽一の記憶が戻った。そうだ、これは榊周次の「人間論の穴」の世界なのだ。「第一話、鉄腕アトムは人間か」でどじを踏んで、これから「第二話」だな。こんな迫真のアドベンチャーゲームを榊周次は発明していたのか、しかしどうもこれは嘘くさいじゃないか、だって二十一世紀にこんな体験型ゲームが作れるわけがない。千年早いよ。

砂漠の中で倒れていたら三年ぶりの雨が降り、驚いて目覚めた。どこからそんな力が出たのか、粉々に砕け散ったような脱力感を引きずりながらも、ずぶ濡れになり、砂漠の中をさまよいつ続けた。何も食わずに七日七晩歩き続けたところで、疲れ果ててもうだめかと思ったが、隊商に助けられた。隊商の隊長は陽一を見覚えがあるといい、ベルトと額の三日月の傷からウルクの王ギルガメシュに違いないという。そういえば陽一もこの隊長に見覚えがある、どこかで見た顔だ、というより自分はこの男を追って旅に出たような気がした。それもその筈、隊長は榊周次が演じているのだから。

陽一は自分が陽一であることはすっかり忘れ

ていたし、ウルクの王ギルガメシュについてどこかで聴いた覚えがあるが、それが自分だという覚えはまるでなかった。オアシスの水溜りに写った自分の姿を見て陽一はたじろいた。精悍だが白髪まじりの皺の深い初老の男だった。

暴君を倒してウルクの王となり

シュメール治め並ぶものなし

エンキドゥ、ギルガメシュと戦えど

戦士の哀しみ通いて抱けり

森の神フンババ殺し拓きたり

文明の世の人の栄えは

森の神殺しし罪を贖いて

エンキドゥ逝く我に代わりて

死霊住む地の果てにあるマルシュ山

エンキドゥ求め我は旅立つ

洪水で生き残りし人たずねては

不死の薬を求め還らむ

十五年経ちて還らぬそのときは、

新王立てて栄え引き継げ

ウルクは意外に近くだった。一月あまりの旅で隊商に送り届けられたのである。もちろん隊商はウルクからたっぷり褒美をせしめようとしたのである。記憶をすっかり失っていたギルガメシュは帰途で、ギルガメシュの伝説を隊長からできるだけ詳しく聞いた。隊長の話は概略こ

ういう内容だ。

ギルガメシュ王は、ウルクの出身だが、キシウの暴君アツガを倒して、その功績でウルクの王となり、シュメールの覇権を握った。その権力があまりに強大だったので、臣下が牽制のために半人半獣のような野生児エンキドゥを神に作ってもらった。エンキドゥは獣たちの中で暮らしていて、人間の横暴から獣たちを守っていたが、シャムハトという宮廷お抱えの娼婦に誘惑され、手なづけられてウルクの町に連れてこられた。ところがエンキドゥはシャムハトとの関係をからかわれて、怒り狂い、ギルガメシュと格闘になった。

最強の男同士の格闘はなかなか決着がつかず、両者は疲れ果て、互いに戦士の孤独が伝わったのか、抱きあったのである。それからギルガメシュはエンキドゥを女を愛するように愛したというのだから同性愛だったのだろう。エンキドゥはギルガメシュの忠実な部下となり、ギルガメシュの権力基盤はさらに強固となったという。

ギルガメシュはシュメール文明をさらに繁栄させようとした。農地や牧場を拡大し、船や建物の用材やレンガを焼く燃料の材木を得るためにディルムント森を伐採することにしたのである。しかし森の木を伐ることは森の守り神フンババが許さない。ギルガメシュはフンババに立ち退きを要求し、戦争となった。エンキドゥは反対だったが、ギルガメシュを見殺しにできないので、フンババとの戦争に参加し、一緒にフンババを殺してしまった。

森の神を殺し、森を伐採したことでシュメールの文明は隆盛を極めることになる。しかし、人間でありながら神を殺したということで神々の怒りは収まらず、天上の法廷で神殺しに対して審判が下される。この判決は主犯であるギル

ガメシュはお構いなしで、代わりに最愛のエンキドゥを死刑にして、ギルガメシュに反省を促すという内容だった。

最愛のエンキドゥを失ったギルガメシュの哀しみは深かった。エンキドゥの死はギルガメシュの身代わりだっただけに、神々の判決は納得できない。死霊が集まる死者の国にでかけ、エンキドゥを取り戻そうと旅にでたというのである。そして死者の国で番人をしているといわれる『バイブル』のノアにあたるウトナピシュティムに逢って、不老不死の薬を手に入れ、ウルクの人々を死から救う究極の偉業を成し遂げようという野望を妻に語っていたという。

もし十五年過ぎても戻ってこなければ、ギルガメシュは死んだことにして、新しい王を即位させるように言い残した。その十五年が既に過ぎてしまったので、王の葬儀を盛大に行い、旅立ちの日に王妃の胎内に宿っていたギルスドゥ王子が即位したという。それはもう五年前だ。この五年間のギルスドゥ王の治世は善政で評判がいいらしい。

隊長の話を聴いているうちに陽一は、すっかり自分がギルガメシュだと思い込んでしまった。しかし過去の記憶は喪失したままだ。ウルクに着いたら信用されるだろうか。ギルスドゥ王やその側近たちは、ギルガメシュをどう扱うのか、いまさら王に復位させられても困る。そんな能力も気力もない。しかも父と子の間にどのような亀裂や葛藤から権力争いが起こらないとも限らない。この帰還は極秘にうちに済ませよう。しかしウルクの神々には報告しなければならぬ。記憶を失ったままで何を報告すればよいのだろう。

隊長に新しい王には極秘にし、妻とシャムハトへの報告だけで済ませたいと申し出たが、そ

れでは隊長は褒美に預かれないから困るという。隊長によるとシャムハトが神殿の巫女になっているので、まずシャムハトに逢い、神殿で復位はせず、ウルクから立ち去ることを神に誓って、その後息子のギルスドゥ王とギルガメシュ王のかつての王妃エメサルと再会してはどうかという提案である。それでは叙事詩はもちろん梅原猛の戯曲ともかなりずれてしまうのだが、陽一はそういう事情も全く記憶になかったから、この提案を呑むことにした。

シャムハトが逢えばギルガメシュが本物か偽者かはすぐに分かるはずである。ギルガメシュに対して官娼として何度も同衾したことがあるので、皮膚感覚からも誤魔化しは利かないと思われる。シャムハトはギルガメシュを見るなりしっかりと抱きついて、激しく泣き崩れたのである。なんとシャムハトは智子の顔をしている。でも記憶を消されているので懐かしさやいとおしさはあふれるのだが、名前が出ない。「おまえを探していたんだ、シャムハト、会いたかった」ときつく抱きしめた。シャムハトは「私のいとしい夫、エンキドゥにはお会いになれたのですか、ギルガメシュ王」と言った。ギルガメシュは、われに返って、抱きしめていた手を離した。「エンキドゥは私を恨んでいる演技をして、私を死者の国から早く返そうとしたのだ」と淋しそうに答えた。

さっそくシャムハトは神々にギルガメシュ帰還の報告をした。すると神々が直々にギルガメシュの見舞いにやってくるというのである。

自らの限界を超えて進み行く、

そこに価値あり人として生く

太陽神ウトゥと水の神エンキがまず神殿に姿を現した。この二神は人間に好意的なのである。太陽神ウトゥは、早速ギルガメシュをねぎらっ

て、「ご苦労だった、ギルガメシュの勇敢さには敬服するよ。地の果ての向こうマルシュ山の死霊の国までエンキドゥと不死の妙薬を求めて旅をしていたというじゃないか、人間の限界に挑戦する勇氣は見上げたものだ。私は人間は人間の限界に挑戦するということに存在価値があると思っている。他の動物や神々だって、それぞれの与えられた限界からはみでようとはしない。人間だけが己の限界を超えようとするのだ。」ギルガメシュは恥ずかしそうに応えた。「何も限界に挑戦しようなんて考えているわけではありません。やむにやまれぬ気持ちからしたことです。他の動物だって環境が変われば、その変化に適応しようとして姿を変えるということですよ。」「それはそうだが、他の動物は姿を変えて別の種類の動物になってしまう。人間は、人間の姿のまま、人間のこれまでの限界を超えていく、そこが素晴らしい。それでエンキドゥには逢えたのか。」「それが……」記憶喪失だといえば、行ったことも疑われてウルクの王としての面目が立たない。

「何だ、逢えなかったのか」と太陽神ウトゥはがっかりした面持ちで言った。「逢えたことは逢えたのですが…」「ほう逢えたのか、それでどんな様子だった、わざわざ尋ねてきてくれて大感激していただろう。」「本当はうれしかったのですが、あそこは死者の国で生者が長居すると帰れなくなるからでしょうか、わざとそっけなくしていました。私の身代わりにされたことで私を恨んでいるときえ言われました。いや、ほんとに悲しかったですよ。私があんなに愛したエンキドゥですから。」こう答えておけば、神々も疑わないだろうと考えた。なぜなら、エンキドゥはギルガメシュを愛していたのだから、大感激して喜んでくれたに違いない。だからそう報告すれば、一番自然である。マーシュ山までたどり着けなかったのに嘘をつくとするれば、「エンキドゥは大感激して喜んでくれた」と神々に

報告するはずである。わざわざエンキドゥがそっけなかったとか、恨んでいたとか言う筈はないのである。だからかえってギルガメッシュの報告は真実味があるのだ。

「そうか、でもどうしてわざとそっけなくしていたと分かったのだ」水の神エンキは突っ込んでたずねてきた。「ウ…ウ…」なんて答えればよいか返答に窮した。「ウトナピュシュティム様ですよ。ウトナピュシュティム様がそのようにエンキドゥの態度を診断されたのです。」太陽神ウトゥは感心して言った。「そうだろう、そうだろう。それじゃあ、ウトナピュシュティムに逢えたのだな。それはよかった。」水の神エンキは弾んで訊ねた。「じゃあ不老不死の薬は手に入ったのか。」しかしギルガメッシュは空の手を上げ、肩をすぼめた。

「ご覧の通り、何ももって帰れませんでした。死者を取り戻したり、不老不死の妙薬、若返りの妙薬を手に入れようとしても、それは人間には運命があって、できっこないのです。ところが私は、自分のことを三分の二ぐらいは神で、自分にとって不可能はないと思いついていました。自分の情熱の力で死者も甦り、不老不死の願いすら叶えられると思いついていました。ですから、本当にお恥ずかしい限りです。」

シャムハトが目を輝かして訊ねた。「ウトナピュシュティム様が不老不死を保っておられるのだから、不老不死の妙薬はやはりあるのでしょうか。」「ウトナピュシュティム御夫妻も単調でいつまでも死なないことに耐え難いご様子でしたね。彼らがどうして不老不死なのか分からなかったのですが、彼の友人クルラがどうも不老不死の妙薬を持っているという話なのです。不老不死の妙薬を手に入れるための資格試験がありましたね、私は見事落第しました。」

ただ七日眠らずにいるそれだけで
不死の妙薬手にせしものを

太陽神ウトゥは驚いたように言った。「三分の二は神といわれた超人ギルガメッシュでも落第するとは、相当難しい試験だったのでしょ。」「いや、合格できないことはないのです。フェイントですね、あれは。見事にひっかけられましたよ。」水の神エンキはじれたように言った。「そのフェイントの内容を是非聞かせてくれ。神々の中でいい四方山話（よもやまばなし）のネタになるよ。」「七日七晩寝なければいいのですよ。死と睡眠は近いので、不死の薬を手に入れようとするのなら、せめて睡眠を七日七晩我慢できなくては駄目だということで、すぐに挑戦したのです。」

シャムハトは意外な表情をした。「それなら私もクリアできそうね」「それが見張りがなくて、一日に一回お婆さんが朝パンを届けてくれるだけで、あくる朝パンが残っていれば失格だということなのです。」「なあにじゃあ朝起きていればいいのだから、普通に生活していれば合格じゃない。」シャムハトはあきれた。「簡単だろう。簡単すぎるよな。それでつい油断して二・三時間眠るつもりが、旅の疲れからか七日七晩眠り続けてしまったのだ。アッハ、ハ、ハ」しばらく間をおいてからその場の一同が大爆笑となった。

「つまり人間起きていようと思えば、眠らなければならぬ。起きていることの中に眠るといことが織り込まれているのだ。それと同じように、生きるということは、死に向かって生きるということであり、いつまでも死なないということは、生きないのと同じことなのだ。もし絶対に死なないのだったら、何も食料を集めてくることもなければ、富を積み上げることもない、あくせく働かなくてもいいわけだろう。勉

強をしなくてもいいし、物を食べたり、息をするのだって面倒くさくなるかもしれない。つまり死があるから生もあるのだ。それを生だけとって、死を捨てようとするからかえって苦しくなるのだ。与えられた有限の生を精一杯充実して生きれば、それが幸福なので、死がなくなるとたん、人間はいかに生きればよいか分からなくなるんだ。」ギルガメシュになっている陽一はまだ高校三年生の筈なのにすっかり六十年は生きてきたような気持ちになっていた。

「ギルガメシュ、よく生還できたな、なかなか悪運つよいじゃないか。どうもエンキドゥも取り戻せなかったと、不老不死の妙薬も手に入れられず、体力は使い果たし、とってきたのは歳だけだったようだな。まあ人間共の思い上がりには、いい薬になっただろう。」大気の神エンリルは人間には厳しい、皮肉たっぷりそう言った。アン大神の道楽娘イナンナは、入ってくるなり「あらー、ギルちゃんもずいぶん皺くちや爺さんになったわね、あんなに精悍な若者だったのに、私と遊んでいれば、そうなる前にたっぷり生まれてきたことの喜びを味わうことができ、官能的な死を体験できたのにさ。ところで死霊たちの国はどうだった、私はああいうのは、気持ち悪くていやだけど」と突き放すように言った。

「森の神フンババを殺したのは私の罪でした。それを私を罰せずに、エンキドゥを身代わりにしてしまわれた。それがどうにも納得できない。エンキドゥをどうしても取り戻したいという気持ちを抑えられなかったのです。私はウルクの王として人間たちをもっともっと豊に幸福にしてやりたかった。そしてできることなら、死の哀しみからも人間を解放したかった。エンキドゥは土になってしまった、私も土になってしまうのか、それでおしまいとは、なんと恐ろしいことでしょう。それに私にとってエンキドゥ

を失った哀しみはとてつもなく大きく、それを招いた自分の罪への後悔は激しくて、とても王位に居座ってウルクにいることはできませんでした。エンキドゥを取り戻せないくらいなら、地の果てで野たれ死んだほうがましだとさえ思ったのです。」

森焼きてこの手に入れし幸福も
森なくしてはやがて費えぬ

「ギルガメシュが考えていることは、常に人間たちの幸福であり、自分や自分の友、自分の愛する人のことだけだ。そのためには、森や森の木々、森の動物たちがどうなってもよかったのだ。それで森の神フンババだって殺すことになってしまった。しかし森の神を殺し、森を焼き尽くして得た人間の幸福というものは、果たして本当の幸福なのか、エンキドゥを失ってはじめて、その間違いに気づくことになったわけだな。」大気の神エンリルは確認した。ギルガメシュはエンリルを睨み付けた。「私はエンキドゥの処刑を納得しているわけではない。ただ、エンキドゥは獣のような素直な心を持っていた。私はそんなエンキドゥが好きだった。獣の血が通っているエンキドゥを森の獣たちと戦わせることになったのは、私の罪だ。エンキドゥを失ったことは、我々人間と獣を結び付けていたものを切断したことでもあるのだ。それは人間と自然との断絶を意味する。森や森の獣たちと共に生きることによって、我々人間は自然の生命を生きることができるのに、人間のためだけにある牧場や畑にしてしまえば、しまいに自然は人間に復讐の牙を剥いて災いをもたらすようになるだろう。」

太陽神ウトゥが口を挟んだ。「私は人間たちの森を切り開き町や牧場や畑を作ろうという遠大な文明構想を応援した。森の神フンババをやっつける戦いでも、日照りを起こして森の神を弱

らせたりした。もちろん森がなくなれば、自然環境のバランスが崩れ、最後には人間だって暮らせなくなるとは分かっているが、なにしろ森を本格的に切り開くのはこれが最初だから、まだまだ大丈夫だと思っていた。しかしギルガメシュがいなくなってからも、森林の伐採が各地で広がり始めている。だんだん心配になってきた。」

大気の神エンリルは大声で叫んだ。「そうなんだ、第二、第三のギルガメシュが登場している、人間の欲望には際限がない。これから何百年、何千年と人間たちは森林を伐採し続けるのだ。森の神フンババ殺害は一度きりの事件ではない、おそらく森が地上から消えてなくなり、地上が砂漠で蔽われ尽すまで、人間はフンババを殺し続けるのだ。そして森を破壊した人間は、川も湖も平原も海も地上や天空のすべての神々を殺し、唯一つの自らの守り神を信仰するだけになり、最後にはその神も殺してしまうだろう。」

日光の猿でもするや反省は、
知恵寄せ合って自然再生

「人間には考える力、反省する力がある。」主神アンの大神が登場した。「人間は欲望に任せて、自然を自分勝手に作り変え、獣たちを滅ぼしていくだろう。しかし自然を破壊するということは、自分の命の源を破壊することだ。やがて耕地は砂漠に侵食され、自らの文明を滅ぼすことになるだろう。その時に、考える力、反省する力が働けば、自然との調和を学び、森の再生や獣たちとの共生に取り組むことになる。自然の中に宿る生命への信仰に帰ることになるのだ。果たして彼らの考える力、自然から学んだ知恵を分かち合い、寄せ合って共に力を出し合って、自然と共生する能力が彼らと大いなる生命を守るだろうか。」

「お父さん、人間が考える力を持ったのは、偶然樹上生活ができなくなって二足歩行をするようになったからでしょう。お父さんがおもしろがってやられたからでしょう。それで直立して頭脳が大きくなったのと、手の働きや目の働きが活発になったので急激に賢くなり、喉も発達したので発声が自由になり、それで声を信号化して言語を使うようになったからでしょう。それもこれも彼らが肥大していく欲望を充足させるための活動の結果なのよ。だから目先の欲望を実現するための知恵はいくらでも発達するけれど、それを抑制して、自然全体の調和を図るとなると、彼らの欲望に邪魔されてなかなかできないのじゃないかしら。それより、これ以上人間が自然を破壊するようなら、そろそろ人間共を滅ぼしにかかりましょうよ。」イナンナは父神アンに反論した。

大気の神エンリルはうなずいて言った。「そうですぬぐずぐずしていると我々が先に人間に滅ぼされかねないですからね。」これはやばいことになってきたとギルガメシュはうろたえた。「神々よ、私がよくウルクの人々に話して聞かせます。環境問題を教える仕事を息子王を補佐して私が専門にやりますので、どうか滅ぼすなどと脅かさなでください。」

主神アンは苦笑していった。「残念ながらギルガメシュよ、あなたの寿命はもう尽きようとしているのだ。」そう叫ぶと突然神々の姿は消え、人間たちが神殿になだれ込んできた。「ギルガメシュ王を騙(かた)る偽者はどこだ。」ギルスドゥ王が先頭に立っている。「お前か、なるほどそっくりだな。しかし本物は今しがた帰還されるや息を引き取られた。彼は背中の獅子の刺青から間違いない。背中を見せてみる。ほらないじゃないか。やはりお前は真っ赤な偽物だ。」なんとギルガメシュ王ではなかったのか。上村 陽一は愕然とした。しかし彼は王の刃を逃れることは

できなかった。大上段から振り下ろされた王の 刃は見事に陽一の脳天を真っ二つにしたのであ

試み

絶食することにした

昨日の昼から始めている

絶食する狙いは外でもない

絶食の狙いは

このように語りかけてくるのを待ちうける事で

そこで私は 言ってやる

どうして そのようにしてまで

二、三日でも食べられないと ひもじくて

人間を生かそうとするのか

このままの状態が つづけば 餓死するのではないか

目的は何か 教えてくれたら食べると

不安になって 食べられるよう 必死に努力する

人間の分際で知る必要はない 死ぬなら死ぬと言うか

食べ物をお口にして 蘇った 餓死せずにすんだと喜ぶ

餓死を賭けてでも知りたいと言うのなら

ひもじさや餓死の恐れ というような枷が

教えてやるうと言うか

身体に組込まれていて 死なれないように造られているともあれ 絶食を続けてみよう

私たちに死なれては困るらしい

上野山 定由 (参加者)

絶食を続けていても そのうち

ひもじさに悲鳴をあげて 食べ始めるだろうと

高をくくっている事だろうが

衰弱がひどくなって 今日あすの命となると

あわてて私の耳もとで どうか食べてくれ

食べて 死なずにいてくれ と頼むに違いない

Poème

「人を殺す」というハードル

平等 文博（会員）

「なぜ人を殺してはいけないのか？」という、一時期大きな話題となった問いかけに対し、むしろ「なぜ人を殺すことができるのか？」という問いの方がより根源的に重要ではないのかと、この「通信」誌上でも私は何度か主張した（第31号所収の「問われるべきはくなぜ人を殺すのか」である）ほか。

先日、滝川一広・佐藤幹夫『「こころ」はだれが壊すのか』（洋泉社 y 新書）を読んでいると、興味深い研究結果が紹介されていた。それは、精神科医中川久夫の話によればという記述で、出所が示されていないため原典で確かめることができなかったのであるが、要するに次のような内容である。

ある研究によれば、戦場で敵味方が銃を構えて相対峙し、いざ戦端が開かれたときに、敵を狙って発砲できる兵士は15%に満たず、ほとんどは狙いを外して撃つか、そもそも撃つことができないかであった、というのである。そのために、ためらうことなく敵を殺せる兵士をいかに訓練によってつくりあげるかということが、軍関係者の重要な課題となり、そしてかかる軍事訓練に動員されたのが心理学的技法だったのである。

恐らくそれは、第一次大戦時の出来事をデータとした研究であろうと想像するが、いかに戦闘中の兵士といえども、人を殺すことのハードルはそうそう容易に乗り越えられるものではなく、そのために特別な訓練を必要とするというこの話は、私には非常に興味深いものであった。

本のその章ではさらに、ある映画が紹介されていた。『2001年宇宙の旅』でも知られるスタンリー・キューブリック監督の1987年の

作品『フルメタルジャケット』である。ヴェトナム戦争を題材としたこの映画を、名前にうっすら記憶があるものの私は観ていなかった。たまたま期間限定でDVDが売り出されるという情報を得て、すぐに買い求めた。

映画は二部構成になっていて、後半はテト攻勢を背景にしたヴェトナム戦地でのエピソードであるが、前半（映画全体の3分の1強）に海兵隊の新兵訓練の様子とそこで起こった悲劇がかなり詳しく描かれている。

今は志願兵制の米軍も当時は徴兵制だったと思うが、ごく普通の気のいい若者たちが新兵（二等兵）としてまずこの訓練所に送られ、約2カ月で一人前の「殺人者 killer」へとつくりかえられていく。

映画の冒頭、陽気な音楽とともに次々丸刈りにされる若者たちの髪の毛が床一面に積もっていくシーン。何かの連想が私の中でうごめくがまだよく分からない。場面が進むにつれてしいにはっきりしてきたその連想とは、アウシュビッツの光景だった。「囚人列車」から降ろされたユダヤ人たちがまずされたことは、荷物や着衣をすべて剥ぎ取られ、男も女もみんな丸刈りにされ、名前を奪われて代わりに番号を入れ墨される。つまり、人間の個別的な存在性を、その尊厳を、まずは物質的に剥奪しつくすという作業である。そのことを通して彼らは「人間でないもの」にされる。

新兵たちもまた、丸刈り、軍服、軍人口調、起床から就寝まで生活すべての規律統制によって個としての存在が全否定される。名前についても、訓練教官の「鬼軍曹」によって1人ひとりに皮肉なあだ名（アフリカ系の若者に白雪玉

snow ball など) がつけられ、それが「名前」になる。ちなみに主人公の若者も、おふざけ野郎 joker という名前を頂戴する。

新兵に対する「しごき」については、旧日本軍の内務班での暴力がよく体験者から語られる。アメリカ海兵隊の新兵訓練においても「鉄拳制裁」は確かにあるようだが、しかしこの映画を観る限り海兵隊のそれは単なる暴力ではない。一見粗暴で卑猥きまわりない教官の言動も、実に巧妙にその心理的効果が計算されている。すべてが、殺人者を養成するためになされる、プロによる「訓練」なのである。

一例をあげよう。まず新兵たちに徹底的に叩き込まれるのが、お前たち一人ひとりは何の価値も能力もない「クソ」「ウジ虫」だということである。鬼軍曹の卑猥な言い方によれば、「パパの精液がシートにしみをつくって、ママの割れ目に残ったそのカスから生まれたのがお前たち」というわけだ。

教官を先頭に、「俺たちはこの銃で闘い、この〈大砲〉で楽しむ」と片手で銃を担い片手で股間を握って行進するシーン(次頁の写真)が象徴的だが、セックスをただの性的欲望に還元したうえで、下卑たお楽しみのためたまの結果として生まれ落ちただけの取るに足りないお前たちも、一人前の海兵隊員になることで永遠の価値に与ることができる、そう教官は教える。

兵舎から訓練場までの行き帰り、訓練小隊は教官が歌う猥歌をリフレインしながら駆け足をする。訓練の初め、中ごろ、そして終わり近くの3回そのシーンがあるが、訓練の進度(深度)によって歌詞が変わっていく。最初のころは、「パパとママがベッドでごろごろ、ママが〈欲しいの〉とねだってパパがしごく」という先に述べた調子である。中ごろになると、「アンクルサム(擬人化された合州国)がほほえみかける海兵隊、おれの軍隊、貴様の軍隊、おれたちの軍隊」となる。それに続いてはまた「聞いた話によりゃエスキモーのプッシーは冷凍マン庫」とエロ歌

になるが、ここでは合州国=海兵隊=「おれたち」というように、国家・集団への個の帰一が歌われる。さらに訓練の終盤になると、「海兵隊員は棺に入って帰宅する、勲章をいっぱい飾られて」と、手柄を立てて死ぬことこそが海兵隊員の本命であると歌われる。卒業を迎えて教官が、「海兵隊員は死ぬために存在する。だが海兵隊は永遠である。だから海兵隊員も死して永遠なのだ」と訓辞する通りである。

「人をためらうことなく殺す人間」は同時に、「自らの命をためらうことなく捨てる人間」「人を殺すことによってしか自らの存在価値を証することができないと思い込まされた人間」である。言い換えれば、他人を殺す前に、自らの人間性をすでに半ば殺してしまった人間である。

では、前半の最大のエピソードである一人の新兵の悲劇を見ることで、それを確認しよう。

訓練小隊のなかに、鬼軍曹から「ほほえみデブ」(「ほほえみ」とは「締まらない顔つき」の意)とあだ名された男がいた。運動神経がにぶく体が重く何かにつけヘマをする「デブ pyle」は、いつも教官に罵声をあびせられ殴られる。

ある日、教官が「ジョーカー」に、マンツーマンで「デブ」の世話をするよう命じる。彼の苦手な銃の扱いや障害物の越え方から軍靴のヒモの通し方まで、「デブ」ではなくレナードとほんらいの名前で呼びかけながら一つひとつゆっくりやさしく教える「ジョーカー」に向ける彼の眼差しは、子どものように人なつこく穏やかである。前半でただひとつ、人間的な交流が感じられるシーンである。

ところが、悲劇はそれから始まる。当初は、「デブ」がヘマをすると、その罰は彼個人に加えられていた。しかし、個人から集団(「おれたちの軍隊」)へと訓練の段階が移行すると、罰は集団に加えられるようになる。それも、彼を罰するのではなく、彼以外の全員にペナルティーを課すという巧妙で汚いやり方をとる。当然、集団の憎しみは彼に向けられる。憎しみという負の

情念による集団意識の形成に、彼はスケイプゴートとして利用されたのである。

その雰囲気を感じた彼が、「ジョーカー」にこう尋ねる。「ヘマばかりしているからみんな僕のことを嫌っているよね。君もそうなのかい?」「思い過ぎだよ、何とも思っちゃいないさ」と答える「ジョーカー」。だが、恐ろしい仕返しを彼を襲うことになる。

深夜、ベッドに寝ている「デブ」を毛布で身動きできなくさせ、固形石けんをくるんだタオルを手にした小隊の全員が、代わるがわる彼を打ち据えたのである。最後に、一瞬ためらいを見せた「ジョーカー」も、「やれ!」と仲間にながされて何度も彼を殴りつける。ただ一人、人と人の心を通わせ信頼を寄せていた「ジョーカー」にさえも裏切られた——その夜を境に、「デブ」の人間性は完全に壊れてしまう。誰とも口をきかず、自分の銃だけを愛おしみ、射撃の腕前とその破壊力が彼のすべてとなる。

海兵隊の意図からすれば明らかに「欠陥品」であるが、訓練のまぎれもない「成果」として、善良で愛すべき若者が狂気の「殺人者」へと変身をとげる。

卒業式を終えた最後の夜、見回りをしていた歩哨の「ジョーカー」が、物音を聞きつけトイレに入る。そこには、便器に腰掛け「7.62ミリ完全被甲弾フルメタルジャケット」とうめくようにつぶやきながら鬼気迫る顔つきで弾倉に実弾を込めている「デ

ブ」(下、写真右)がいた。銃に弾倉を装填した彼は、立ち上がって大声で「銃の祈り(キリスト教の主の祈りに似せた銃へのいわば〈信仰告白〉)」を唱える。その騒ぎに駆けつけた鬼軍曹を、集団を支配してきたこの力の権化を彼は一撃で射殺し、そして「シャーリーン(女性の名前)」と名づけた愛銃を口にくわえて、自ら命を断つ。

以上が、この映画に描かれた「人はどうして人を殺せるようになるのか」という問いへの一つの回答(例示)である。「人を殺す」というハードルは、それほどたやすく越せるものではない。人間の基本態は「人とともに生きる」ことだと私は考える。だが、人間の特長ともいべき可塑性の高さは、条件次第で人は容易に「人を殺す」者にもなりうることを示している。

私が危惧するのは、映画のような特別な訓練よりむしろ、人と人との関係が分断されて諸個人が孤立し、競争社会の圧力でお互いが敵対させられ、個人の自尊感情が損なわれている昨今の日常である。自由化と自己責任の名のもとに広がる冷淡な弱肉強食の格差社会、マネーゲームの勝者が「現代の英雄」に祭りあげられるこの社会の日常が、人間性を破壊された「殺人者」を生み出す土壌となっているのではないか。社会のあり方・人間関係(人間同士の相互的ふるまい)のあり方を根底から変えることなしには、「心のケア」も「厳罰化」も危機の進行をおしとどめることはできない。



大阪哲学学校 2005 年（第 11 回）総会報告・抄

大阪哲学学校運営委員会

標記総会を、2005年11月3日尼崎労働福祉会館会議室にて開催しました。総会は、出席6名、委任状提出19名の計25名により成立し、午後3時から6時まで運営委員会提出の総会議案を審議のうえ承認しました。主な内容は次の通りです。

（1）今年度の反省と今後の課題

【会員の異動と現状】

会員総数43名（前総会より6減）：一般会員19名（同4減）維持会員24名（同2減）

・登録期限切れ退会者がある一方、催しへの新規参加者の会員登録が少ない。会員の世代交代の時期に来ており、新しい世代を意識的に獲得・育成する努力が必要である。ホームページを見て参加した比較的若い人が出てきているのは新しい傾向であり成果である。

【催しならびに参加者の状況】

・前総会以降の催し数（含夏合宿）は21回
・哲学学校ならではの催しとして、「〈知の歴史〉入門講座」をスタートさせ、3つのシリーズがほぼ終わろうとしている。いずれも毎回20人前後の参加者があり、新規参加者も出てきており、順調なスタートと評価できる。これからも哲学学校の催しの柱として継続し、全体としてのプログラムの整備など、今後検討したい。

（2）各活動分野の状況と個別課題

1. 広報活動について

・ホームページ

最近哲学学校あてメールが届いていないことが判明、原因追及している。ホームページのイメージ変更を検討中。会議室は、ホームページのトラブル処理が済み次第、マルチスレッドタイプへ移行を予定。

・哲学学校紹介の広報用小冊子

三つ折りタイプのものを作成する。

2. 「大阪哲学学校通信」について

・執筆者の固定化傾向が改善されず、投稿数自体も少なくなり、発行遅延が常態化しつつある。会員への執筆の働きかけを、より積極的におこなう必要がある。

（3）財政について

・昨年度の赤字から、わずかながら黒字決算となり、比較的健全な財政状況にある。ただし、財政規模は収支ともに縮小傾向にある。

（4）今後の企画

1. 2006年前半の催し（予定を含む）

・1月21日 新年会員・参加者交流会

・2月～3月

笹田利光 〈知の歴史〉入門講座（第4シリーズ）

・3月～4月

平等文博 「現代の倫理を考える」（仮称）

・5月～6月 ※交渉中

恒木健太郎 〈知の歴史〉入門講座（第5シリーズ）

・6月～7月

「憲法九条の思想」もしくはグラムシ特集

・8月26日～27日 夏期合宿

2. 開校20周年記念企画

・2006年は開校20周年にあたるので、11月に記念の催しと祝賀会を開催する。詳細については今後検討する。

（5）第11期運営委員会人事

校長・山本晴義（参与兼務）

参与・木村倫幸、笹田利光、田畑 稔

運営委員・伊元 勇、高根英博、中村 徹、

西山 覚、平等文博（委員長）、山口 協

—以上

大阪哲学学校のご案内

〈心の専門家〉という装置

—心理還元主義の今日的役割とそれへの批判—

●講師：小沢牧子さん（日本社会臨床学会運営委員）

近年、「心のケア」や「心の教育」という甘い言葉が、あたかも私たちの抱えるさまざまな困難を解決するキーワードのように流布されています。社会のしくみや人間関係のあり方に起因する諸問題や「生きづらさ」を、個々人の心の問題に還元し、病名をつけて「心の専門家」の療法にゆだねるという心理還元主義の風潮が、社会変革をめざす諸運動の後退とらばらに広がりを見せています。「臨床心理」学者たちの協力で作られ、文部科学省が全国の小中学生に配布している『心のノート』も、子どもたちをそうしたものの見方へと誘導し、そのうえに社会順応の道徳や愛国心を説こうとするものです。

哲学学校では昨年来『心のノート』を二度にわたって取り上げてきましたが、さらに深くこの「手ごわい巧みな権力的装置」（小沢）である心理還元主義の本質と問題点、その今日的な役割について学び考えるため、臨床心理学や心理カウンセリングに長年にわたって批判的に関わり、精力的に発言しておられる小沢牧子さんをお招きし、詳しくお話をうかがうことにいたしました。

小沢さんから直接お話をうかがいディスカッションする機会は、大阪ではめったにありませんので、関心をおもちの方はぜひご参加ください。

【小沢さんの最近の主な著書】

- ・『カウンセリング・幻想と現実』（日本社会臨床学会編、上下巻、現代書館、2000）
- ・『心理学は子どもの味方か？—教育の解放へ』（古今社、2000）
- ・『「心の専門家」はいらない』（洋泉社新書y、2003）
- ・『「心のノート」を読み解く』（共著、かもがわ出版、2003）
- ・『心を商品化する時代—「心のケア」の危うさを問う』（共著、洋泉社新書、2004）

2005年12月10日（土）

- 時間：午後1時30分～5時ごろ
- 場所：尼崎市立労働福祉会館（阪神尼崎下車）
※阪神尼崎駅西側の南北道路（五合橋線）を道に沿って北へ徒歩8分
- 参加費：千円（維持会員五百円） ※予約不要